

## ESDの課題

ESD国内実施計画（平成27年ESD関係省庁連絡会議決定）では、持続可能な開発のための教育（ESD）を次のように示しています。

人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大など、人類の開発活動に起因する現代社会におけるさまざまな問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの問題の解決につながる新たな価値観や行動などの変化をもたらし、もって持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動（下線、儘田）

その実施に当たっては、各単元（題材）の指導内容がどの持続可能な開発目標（SDGs）につながるのかを、まずは教師が認識することが必要です。その上で、指導をとおして、教師が子どもに学習内容とSDGsとの関連を示したり、学習の振り返りの場面などで、学んだことがどのSDGsの達成につながっていくのかを子ども自身に考えさせたりすることにより、SDGs達成への意識は徐々に高まっていきます。

こうした授業実践の積み重ねとともに、子ども自身がESDを日常茶飯事のことと捉え、できることから実行するようになることが大切です。私はそのヒントが、東日本大震災の折、各国から寄せられた日本への賛辞の中にあると捉えています。

次号から「ESDをもっと身近に」というテーマで、拙論を連載します。



### 準備したものに、とらわれない

文筆家、クリエイティブディレクター 松浦弥太郎

準備は大切ですが、とらわれるのは考えもの。全ては相手あってのこと。若い人を想定してプレゼンの準備をしたとき、もしかしたら年配の人が多いかもしれない。女性と商談をするつもりが、担当者は男性かもしれない。それでもかまわず、準備した原稿を読み上げたらどうでしょう？ 準備したものにとらわれず、状況に合わせて話を変えましょう。逆説的ですがそのためには、たくさんのプランを準備しておくことです。

出典：「しごとのきほん くらしのきほん 100」（マガジンハウ

※ 私も学校訪問の折に、1か月ほど準備したプレゼンテーションを、あえて行わなかったことがありました。